

彦山権現誓助劍

毛谷村の段

「勝負は見えた弾正殿、お手柄く。立ち合ひ召さるゝと早や勝ちと見えました。なんと曾平治殿、違ふたものではござらぬか」

「如何様、軍八殿の言はるゝ通り、あつぱれ御手練でござる。ヤイ六助、我に勝つ者あらば奉公せんなどともなげなる広言は、最早これではれまいがな」

「イヤモ、段々誤り入りましてござります。なにが山稼ぎの透間には、在所の者共を相手に我流無法の叩き合ひ。『ヤレ六助は劍術がよいは』の、『兵法を抜けてゐるは』のと、誰が言ふとなき取沙汰。ばつと噂立つたのが今での迷惑、誠の芸に出合ふては、なかく叶ふものではござりませぬ。怖やのく」

「そりや知れたことだ。おのれが雑言吐くを、殿も憎

とすな。これからが修行のところだから、随分出精いたしたがよい。なれど、以後をきつと嗜みをらう」

「ア、コレ先生要らざる御教訓、お構ひなされな。ソレ家来共、乗物これへ。イザ先生お召しなされ」

「これは憚り。やはりこの儘歩行いたさう」

「イヤテヤ、只今よりは殿の御師範。我々がためにも先生なれば、平にく」

「しからば御免」

と、乗り移るを、

すぐに昇き出すお六尺、七尺退つて師範を得、悦び勇み出でゝ行く。

門送りして六助は、つゝくり立つて独り言、

「ア、誰しも孝行にはしたいもの。見ず知らずの人なれど、親御を大事に思ふて、侍の言ひ難いことを打ち割つて頼ましやつた、その実心な所がどうも黙し難なさ。契約の通り打ち負けて進ぜた今日の試合、イヤコレ必ず礼には及ばぬぞや。これもやつぱり親の威光故

しと思し召さばこそ、六助に勝れし者あらば、五百石にて召し抱へんとある高札を、所々に立て置かれたてや」

「オ、サ、しかるところ鞍馬山の僧正も閉口する劍術者、微塵流の親玉が現はれ出でし故、殿にも甚だ御悦び。すなはち御前に於いて兩人が立ち合ひ、御覽遊ばされたく思し召せど、家老轟殿が今一息吞み込みだから、おのれがあばら家にて立ち合はせ、『打ち勝つに於いては召し抱へよ』と、兩人へ検分の役仰せ付けられた。余程難しい試合であらうと思ひの外、イヤ手間も隙も要ることか。かの城下町の煤取りに古畳を叩くより心安く見えたはいハ、ハ、ハ。テサテ先生、恐れ入つた。イヤまづ、衣服を召し替えられよ。早くく」

と広蓋に、吉良流の折形包み、熨斗目の衣服麻袴、御紋付々着せ替ゆれば。

忽ち見交はすその人柄、詞付き早や横柄に、

「イヤナニそな者、たとへ打ち負けたればとて力を落ちやと思ふて、存生の内に随分と孝行を尽くさつしやりませ。おれが様に死に別れといふものは、何したとてとんとまめしげはないぞいの。必ず大切にさつしやれや」

と、言ひつゝ見やる

鳥道、真黒になつて山賤共、すたく息せき走り付き。

「サアくくく六助どん、内へ這入つた。這入つた。

這入つたくく這入つたくく。へちやげたはいのく、こちらまでも鼻がへちやげたはいの」

「ハテ喧しい、何のこつちや」

「何のこととは、こなたのこつちや。六助に勝つた者は抱えうと、殿様から方々へ立てゝ置かしやつた高札を、奴共が皆引き抜いて去んだはいの。ぢやによつて、へちやげたはいのく」

「そりや何ぞあつちの勝手づくで、持つて去んだものであるぞい」

「イヤくそればかりぢやない『六助めが頼柄とはきつい違ひ、打たれをつたがそのいぢらしさ。大方骨が

砕けたである、イヤ今時は泣くく頭の欠けを尋ねてをるである』のと、口々吐かして去にをつたが、こなさんほんまに負けたのかい」

「イヤ嘘ぢや。殿様の御意ぢやから勝負をせうと言ふては来たれど、『こゝで立ち合ふては晴れ立たぬ、殿様の言ひ付けならば御前きろりがよい。小倉からお召しなされたら何時でも往つて勝負せう』と追ひ戻したが、それを腹立てゝ悪口言ふたのであるぞいやい」

「ムウ、ム、さうかいな。それにまた額のその疵は」

「ムウ、これか、これはアノ、ハ、ハ、ハ。オ、ソレ

く、あの着る物干しに出て入口の石に蹴躓き、竹垣で摺り破つてのけたのぢや」

と、嘘も真赤い血に染みし額押へてくる詞、しぶくながら栗右衛門、

「イヤコレ残りの衆ら、謎がある。六助先生が今の詞と掛けて」

「ムウ、ム、何と解くの」

梅と椿の太木を、すぐに住家の門柱、立ちそふ花も八重吹きの、霞の屋根に蔦の壁、草の柩に佇む老女。外面に干したる四つ身の小袖、

『ハテ心得ず』と差し覗き、見入れる家の

一壁に、鉄棒鼻捻山刀、半弓など掛け置きしは、山立にてもあらんかと、心に納めしとやかに。

「これは心願あつて国々の神社を巡る年寄りの一人旅、脛を痛め迷惑いたす。暫しの宿り御免なれ」

と、案内

聞くより六助は、納戸を出でゝ迎ひ入れ、

「見れば、御老人の旅疲れ、さぞ御難儀。宿はせずとも休息程のことは、ゆると勝手次第」

「これはく忝い。左様ならば」

と打ち寛ぎ、囲炉裏に緩り鑪子の下、

差し焼べる木もほたくと、心置きなき持て成しに。

「イヤノウ御亭主、どうやら独り住みの様に見受けましたが、左様かの。たゞし御両親でもござるかの」

「イヤく、母一人ござつたれど、近き頃相果てら

「サア、『極めてある掛け目より、たんとある干鯛』と解く」

「その心は」

「ハテ、『まけたこえぢや』と思はるゝ」

と、苦り切つてぞ帰りける。

「あいらがあ様の言ふのは、一手も習ふ師匠ぢやと思ふからの親切。馴染みの者共に愛想尽かされても、人のためになることなら厭ひはせぬ。しかし得心したことながら、負けたと思やがつくりと力ない。これはさて、腹までが急に力のうなつた程にの、オツトよし。昨日庄屋から貰ふたぼた餅。鼠が引かずばやつぱりその儘である。ドレ孤児どんにも喰はさう」と表に出でゝそこらを見廻し、

「コレ孤児どん、戻らしやれ、それ崖やなど落ちまいぞ。これはまたどこに遊んで居る事ぞ。孤児どん

く。イヤ戻つた所でかのぼた餅がなくば手持ち無沙汰。まづあるかないか見て来う」

と、子供にさへも偽りを言はぬ生得生え抜きし、

れ、今ではほんの暮暮し」

「オ、それは不自由にござらう。ナントものは言ふてみづくぢやが、わしを親にさつしやれぬか。かう見たところが、丁度よさうな親子ではないかいの」

と、ぶかりしたこと言ふた顔、

どうやら小気味悪ぢやれな、

「ハ、ハ、ハ、座興も旅の憂き晴らし。テモ気の軽いお年寄りぢやの」

「イヤコレ座興ぢやない、真実親になりませう」

「ム、そりやまたなぜな」

「サア心様の逞しさうな、こなたと見込んで来たことぢやもの、万更無手では来ぬはいの。コレこゝに四五十両程はしつかり土産も持つてあるし、まだその上に旨い金儲けの相談もあるはい。サ、早う親子になつてなんにもかも覆ひ隠しなしに打ち明けて、談合する気はないかいの」

と、『金から取り入り詮義』と、急げども急かぬ小領き、

「オ、品によつたら談合もせう、親にもせう。ガとつくりとおれが心の極まるまでは、退屈ながらあの一間で、マアゆつくりと待つたがよい」

「それならとんと腰据えて、やんがて孝行受けませう」

と、互ひに探る肌刀、

身内と知らで暫くは、疑ひ合ひの破れ障子、引立て

てこそ、入りにける。

後には不審とつ置いつ、思案吹き散る春風に、梅が香慕ひ鶯の、轉る声に法華経も、既に暮れぬと告げぬらん。

「ハア、刻限も違へず鶯がもう鳥屋に來た。ア、如何様、鳥でさへ法華経と轉るに、身の忙しさに取り紛れ念仏も碌々に得申さぬ。ア、勿体ないく。イヤ申し母者人、如才ちやごんせぬぞや。必ず叱つて下さるな」

と、位牌に向ひ合掌し、在すが如き孝行を、感ずる天の

加護、やがて深き恵みもありぬべし。

一心不乱他念なく、打ち鳴らしたる鈴の音に、

誘はれ帰る幼子の、目元しをく亡き母と、知らで焦がるゝ子心に、聞き覚えてや拾ひ取り、小石積んではかゝ様と、慕ふ涙の雨やさめ、草葉に落ちておのづから、手向けの水の哀れなる。

賽の河原を目前に、見遣る六助堪え兼ね、その儘駆け降り抱き上げ、

「オ、尤もぢやく、尤もぢやはい。どうぞ逢はしてやりたさに、どこぢやと問へど分ちは知れず。勿論預けさしやつた人は、たゞ一言も得言はぬ最期。すりやいつくの誰が倅かは知らねど、幼氣にしをらしう、

『おぢ様、おぢ様』と廻すもの。憎まうとてこれが憎まれうか、ア、可愛や、可愛やな」

「コレおぢさん、かゝ様はなぜござらぬ。かゝ様欲しい、かゝ様のう」

と、泣き叫ぶ、

「ア、コレ、その様に親を恋ひ焦がれて、煩ひやな

どしてくれなよ。ひよつと死んだら今の様に、賽の河

原で石の数。一重積んでは父を慕ひ、二重積んでは母親を、尋ね焦がれて六道の地藏菩薩に取り縋り、父よ母よと泣くといやい。おれも二人の親に離れ、女房なければ子供同然。ほんに親に逢はれる程ならば、賽の河原はまだなこと。八万地獄の底へでも、尋ねて行きたい逢ひたいもの。何弁へない心から、逢ひたがるのは無理ぢやない、オ、道理ちやく、可愛や」と、抱き締めく声立て、男泣きにぞ嘆きしが、

漸う涙押し拭ひ、

「ア、悪い孤兒どん。おれまでを唆かして泣かした程にの。サ、サ、さつぱりと機嫌を直して、ソレ昨日買ふてやつた疣太鼓、それを叩いて遊ばしやれ」

「イヤく太鼓は嫌ぢや、おりや眠たい。かゝ様と寝たいはいの。寝さして欲しい」

と幼子の、わやくも頑是なき寝入り。

「オ、こりやもう寝入つたさうな。テサテ子供といふものはとんと罪のない仏様ではあるはいの。ドレお

ぢが寝さしてやらうか」

と、共に臥戸の草蓆

折節竹の音も冴えて、吹き暮らしなる虚無僧の、宿求めんと籬に寄り。

「ム、こゝに干してあるこの四つ身は、慥かに覚えある小袖」

と、取らんとするを後から、

「こりや盗人め」

と三三人、掴み掛かるを

寄せ付けず、振り廻したる尺八の、猛た手利きにぶうく共、眉間肩先、腕骨背骨、打ちのめされて散り散りに、皆我れ先と逃げ帰る。

六助内よりきつと目を付け、

「見れば売僧の偽虚無僧。余程味をやりをつた」

と、詰る詞を

聞き咎め、

「十二、偽虚無僧の売僧とは」

「ハテ、掟に違ふた身の廻りといひ、第一宗門の姿で喧嘩口論ならぬ筈。また常人が理不尽を言ひ掛けても、随分如法に済ませよとは、本山からの戒めでないか。その上尺八の本手は吹かず、今時流行る雑な手を吹き歩くからは、偽者と云ふたが誤りか。山賤はしてみれば、それ程のことは知つてゐる。なんとでござ、梵論字」

と、詞に一癖

さる者と、見て取るこなたも笠脱ぎ捨て、

「オ、その返答して聞けん」

と、ずつと入るより

替筒に、仕込みし短刀抜き放し

と打ち掛くるを

ひらりとかはし、しつかと取り、

「ハ、ハ、ハ、ちよつと見るから女子とは悟つた故に

咎めて見た、ガ敵と言はるゝ覚えはないぞ」

「ヤア覚えなないとは卑怯な奴。杉坂の辺にて五十有めらが三三人、五十ばかりな侍を切るやら突くやら颯り殺し。見るに見兼ねて片端からのめらせ、介抱すれどものを得言はず、その子を指差して押んだばつかり、がつくり往生。目前敵の盗人めら、踏み殺して谷へ蹴込み、連れて戻つてその子に問へど差別はなし。そこで思ひ付いたア、あの着るもの。門口に干して置いたは、その子の所縁を知らうため。心が早う届いたか、現在のお婆御に渡せばこつちも安堵。ようマア尋ねてごんしたの」

と、悦ぶ体

偽りなき、真実見ゆれど、なほも根を押し、

「しかとその詞に違ひはないか」

「何が怖うて偽り言はう。くどい尋ねにや及ばぬ」

と

「シテこなさんの名はなんといふ」

「六助といひまする」

「ヤアなんと」

「サア、毛谷村の六助といふ山賤でござんす」

余の侍を手に掛け、路銀は勿論妹が忘れ形見の幼子まで、奪ひ取つたる山賊め。赦しはせじ」

と振り解き、鋭き切先

無刀の六助、抜けつ潜りつ遇ふ手練れ

『逃さじもの』と付け廻す、

屏風の内より

「お婆様か」

と、駆け出る幼子

見てびつくり、不審ながらも小脇に引抱き、心赦さず身構へたり。

「コレおちさん、お婆様が来てぢや。太鼓叩いて見せていの」

と

「オ、合点ぢや。ガ後に」

「イヤ今ぢや、早う」

と頑是のう、廻せば

廻る子可愛がり、弄び箱を引き寄せて、

「ソレ、今鳴らすぞ。コレ、マ聞かしやれや。二十三

日は母者人の四十九日、杉坂の墓所を戻りがけ、泥坊

「シヤア、すりや八重垣流の達人と音に聞こえた六助様か、ケ、ケ、ケ」

と呆れて取り落とす、

子は狼狽えて逃げ込むとも

知らず構はず六助を、うっかり眺め見取れる。

「今の様に言ふても疑ひ晴れず、やつぱりおれを敵にするか」

「エ、わつけもない。なんの家来の一人や二人、

どうなとしたがよいはいいな」

と前に寄り添ひ後に立ち、

「テモマアあつばれよい殿御。マア何よりか落ち着いた。イヤ、まだ落ち着かれぬことがあるはいの。イヤ申し、お前にはアノ女房さんがござりますかえ」

「イヤ、様子あつて女房は持ちませぬ」

「ありやせまいがな、ないかえ。オ、嬉しや

く。それでほんまに落ち着いた。コレイナアコレ、

お前の女房は私ちやぞえ。サ、サ、サ、サ、女房ぢや

く」

と、かきたくる程今までも、逢ひたう思ふた重荷が下り、三衣袋も茶袋に、して見たがりの水仕業、袈裟も襷と欠け徳利、

「酒も上げうし、夕飯の拵えせう」

と釜の下、薪の湿り燃え兼ねる、『火吹竹は』と尺八を、取り違へては可笑しがり、一人御機嫌

六助は、承知内儀の振り売りを、持て余したるむつと顔。

「とんと訳が知れぬ、今日程けぶな日はない。見ず知らずのわる達が、イヤ親にならうのか、ぢやのと、押し入れ女房の手引きした、あの子も滅多に油断はならぬ。全体こなたはマア誰ぢや」

と、尋ねに

『ハツ』と心付き、俄に行儀改めて。

「言ふべきことも後や先、常々と、様の仰るには、

『豊前の国毛谷村の六助といふ者こそ、剣術勝れし器量の若者。行末はそちと娶合はせ吉岡の家を相続させんと、音信通じ置いたるぞ』と、仰せを守るこの

誰

「サア、同じ家中に名を得たる、剣術師範の京極内

匠

「ムウ、シテこの豊前へ来たられしは、敵の在所は当国と知つてかたゞし、知らずにか」

「サイナア、所々方々と身を躰し、言ふに言はれぬ憂き艱難。尋ね探せど敵の行方、今日が日までも知れませぬはいな」

「ム、ホイ」

『ハツ』とばかりにどうど座し、拳を握り悔み泣き。

園は取り分け悲しさを、遣る瀬涙の口説き言。

「ほんに浮世といひながら、身に憂きことのかくばかり、重なるものか父上の、敵を願ふ門出に、可愛や弟は盲目の、儘ならぬ身を悔み死に。後に見捨て、故郷を、出づるも散りく離れ離れ。在り処を探すその内に、悲しや妹も剣の難。父上のみかそもやそも、二人三人が味気ない、刃の霜と消え残る母と私が憂き苦勞。辛い、悲しい、恥しい。成りも形も厭ひ

年月。二十の上を越しながら、眉をその儘いかなごと、鉄漿も含まぬ恥しさ。推量なされて下さんせ」

「すりや其元は、吉岡一味斎殿の」

「ハイ、娘の園でござります」

「これはしたり」

と手を取つて、無理に上座へ押し直し。

「まづ何か差し置きお尋ね申したいは、御親父一味斎殿御健勝で今にお勤めなさるゝか。御老体のことなれば自然のお疲れにて、もし御病氣など起こりはせぬかと、寝ても覚めても心ならぬはこれ一つ」

と、問はれて

園は涙ぐみ、

「申すも敢ないことながら、おいとしやと、様は、隣

国周防の山口といふ所ぞな」

「ヤ、何がなんと、どうなされた」

「口惜しや聞々と、欺し討たれて果敢ない御最期」

「ヤアくくくくくくく、シテくその相手は町人士民でもあるまい。仮名はなんと、いづくの

なく、雨露、雪の深山路や、野末に荒るゝ一つ家に、

『もしや隠れてあやうか』と、人なき道に日を暮し彷徨ひ歩く親と子が、便りない身の上もなき、便りの

人に巡り逢ひ、私が心の奥底を明かすは二世の我が夫。必ず見捨て、下さんすな、可愛と思ふて給はれ」

と、口説き嘆きて伏し沈む。

悲嘆の涙六助も、

「かゝる憂きにはなほさらに、思ひ忘れぬ一昔。彦

山の麓にて目馴れぬ老翁に目見得しが、『高良の神の使ひなり』と兵法印可の一卷を下されし、その老翁

こそ吉岡殿と察せしことは、かの巻の奥にありく御姓名書き添へられしはこなたのこと。『夫婦となつて吉岡の家名相続致せよ』と、六助如きの拙き技、伝

へ聞かれてありがたや。神の使ひと偽つて印可を与へその上に、『汝に勝つべき者あらば、それに従ひ身を修め、末長久栄えよ』と、教訓ありしは後々まで我慢を押さゆる御情け。喩へん方もなき大恩、肉に沁み骨に通つて忘れず。母だに見送る上からは、尋ね上

つて恩を謝し、師の御顔をにしくと、拝せんものと思ひしも、皆無駄事となつたるか。エ、残念や悔しやな。せめての形見、師の片割れ、あゝら懐かしや」

とお園を拝し、進走る涙はらくく、腸を断つ思ひにて、慕ひ嘆くぞ不憫なる。

時に障子の内咳き、

『オ、師匠を慕ふ誠こそ、遙かに届き冥途より閻浮に帰る一味齋。対面せん』

と聞こゆれば、

思ひがけなくお園がびつくり、

「ヤア、さう仰るは母様か」

と、嬉しさとは押し開く、

内につこと以前の老女、柔和の面皺の波、打掛着なし幼子の、手を引き連れて立ち出づるを、

見るより『ハッ』と飛び退り、

「師の後室とは夢いさゝか、存せぬことゝて最前は、無骨の遇ひ無礼の段、偏に御免下されかし」

と、誤り入つてぞ平伏す。

「イヤノウ、先に逢ふたその時は、智殿とも姑と

も互ひに知らねば他人も同然。今こそ親身泣き寄りし、親子がためには鉄の、立て通したる娘が操。

不憫と思ひ睦じう夫婦になつて下さらば、本望遂ぐるに疑ひも亡き我が夫のこの魂、智引手に」

と、差し出だせば、

「ハ、ハ、ハ、ア、こはありがたき師の形見、辞退申さず頂戴せん」

と、押し戴きし献々の、盃三々九度からず、

ひねた生娘今日よりは、手折らせ初むる花嫁御、

母も悦ぶそのところへ。

「こゝぢやなく」

と杣仲間、遠慮亡骸戸板に乗せ、どやくと早き込んで、

「コレ六助殿、聞かしやませ。二十三日のことであつたがよ、この斧右衛門のお婆が見えぬとて、仲間中が手分けをしての」

「オ、テヤ、なにが所々方々を尋ね歩き、漸うと杉

坂の土橋の下で見付けたところがよ、この様なお蚕

絹を引張らせ、酷く殺してありましたよ。敵が取つて

やりたけれど、うんら共ではなんととしてく。サ、

サ、そこで頼むは六助殿」

と、言ふに

駆け降り死骸の傍、立ち寄つてとつくと見、

「ム、スリヤこの死骸はそちが母か、アノこれが。

ムウ」

と眉に皺、思案の体にと

杣仲間、

「コリヤ斧右衛門、しめり伏さずと頼みやれ」

と、引き越されて

泣いじやくり、

「アイ、アイ、皆のお言やる通りぢやよ、敵を取つて

下さませ。ア、死なしやるはしかその昼間、塩梅よう

出来た自慢の団子、棚からころり、その身もころり。

手で捏ねたとて手捏ねるものか。なんぼう杣が親ぢや

て、かうしやきばつた枝骨は、おろさぐ桶へ這入る

まい。這入りともない死出の山。覚束なかる、ノウ婆

様、婆様、婆様」

と呼ぶ子鳥、餌に響き泣く涙、落ち込む谷に水嵩の、

いと増さりて見えぬらん。

始終とつくと聞きますまし、

「ム気遣ひすな。今の間に敵は取つてやる。その死骸

大事にして、内へ去んで香花取れ。サア早う連れて往

け。早うく」

と六助が、詞を勢にと

斧右衛門、

「ア、その様に言ふて下はるのが、婆様のためにはお寺様の御引導。ノウ皆の衆」

「オ、テヤ、あの人ア、言ははりや、ちつとも気遣

ひ」

泣き顔を、笑顔に直して帰りける。

後に六助、無念の顔色、

「さては、杣が母を誑し込み、おのれが親と偽つて、

孝行ごかしに六助を、深いところへ遣りをつたな。へ

エ思へばく腹立ちや。卑怯未練の微塵弾正、おのれこの儘置くべきか」

と、胸も張り裂く怒りの齒嚙み、庭の青石三尺ばかり思はず踏込む金剛力。

「イヤコレ智殿、待たしやれや。こなたの腹を立てさつしやる相手の苗字は微塵とや」

「いかにも。おのが流儀をその儘に、氏となしたる微塵弾正」

「ナニ、その流儀の名が微塵とな。シテその者の年輩は」

「三十二三至極の骨柄。面体白く目の内冴え、左の眉に一つの黒子。慥かにありく左の肘、一二の腕かけて刀疵」

「さてこそな。同じ家中といひながら、お園といひこの母も、見知らぬ敵の人相書。妹に尋ねその砌、書かせ置いたるこの絵姿」

「まだその上に、妹が死骸の傍にありしとて、小栗栖村にて友平が後の証拠と渡したるこの臍の緒の書付け

「才、出かした、賢いく強いなあ。どりや行かうか」

と言ふより早やひらりと庭へ、一足飛び。

「コレ、コレく智殿、軽き相手と侮つて必ず不覚を取るまいぞ」

「さうともく欺すに手なし。油断なされな、こちらの人」

「ム、ハ、ハ、ハアくくくハ、ハ、ハ、ハ、なにさくく氣遣ひ無用。一旦こそは得心にて、負けてやつたる蠅虫め。謀り取つたる五百石抱へられたも我が情け。か

へつて足を繋ぎしは、もつつけの幸ひ」

塞翁がうまう出会ふた妻姑

恨みは共に六助も、天地に恥じる義の一字、

「鬼神とて京極内匠。我が見る目には一摘み。しかし御知行戴く内は、殿の御家人討ち得難し。試合を願ひ勝つた上、直ぐに仇討御免の訴訟。元首押さへ討たさす」

と、実にも鋭き魂を見極め置きし吉岡が、眼力違はぬ若

に、永禄九年の生れとある。月日を繰れば、三十四歳」

「人相といひ年の頃、割符の合ふたは尋ぬる敵」

「親の敵」

「菊が仇」

「恨みを晴らすは今この時」

「ア、嬉しや娘、片時も早う」

「母様用意」

と勇み立つ。

「ア、コレく、二人共にマア待つた。慥かにそれと知れたれば、六助がためにも師匠の仇。コレ氣遣ひせまい、敵は討たす。ガ真剣当てぬその先に木太刀で試合の意趣返し。打つてく打ちのめし、申し請けての敵討。お袋、女房、いざ一緒に」

と取り出だす、

破れ袴手伝うて、母は腰板当てがふ紐、

お園が取つてしつかりと、結び合ふたる妹背の縁。

「コレおぢさん、ぼんにも敵討たしてや」

者なり。

お園はなほも勇み立ち、咲き乱れたる紅梅の花の一枝取り持つて、

「ノウくわが夫。梶原源太景季は平家の陣に切り入つて誉を上げし箆の梅。これは敵の京極に勝つ色見するこの花の、可愛ひ殿御へ寿」

と、言ひつゝ抱き付きたさも、親に遠慮の手をもちく母も同じく椿の一枝、

「本望遂げたその上ですぐに八千代の玉椿、変らぬ色の花簪殿、いざ」

と打ち連れ立ち出づる、三人が中に

弥三松は、奔走小倉の領内へ

勇み進んで、出で、行く